手先の動きと子どもの感情⑧

清水エミ子

一、思いがけないつまずきを真けんにうったえ知らせてくれる手と指

子どもたちは、心の動きをすぐに行動に移す。この時、子どもたちは、子どもなりに目的を持って、その目的に対して予想というか、予期というようなものを持って行動（活動）している。

その予想が、こわされた時、子どもたちは、失望し、失敗したと感じる。

こんな失敗した時の手先の動きと、失敗の次にくる、手先の行動のちがいにおどろかされたのだ。失敗の次にくるきんちょうは、顔や体全体の表われとはおどろくほどちがっている。

例1　友だちの肩をたたいて呼んだ時、まちがえてしまった時の手先と、次に友だちを呼ぶ時の手先（写真1～4）

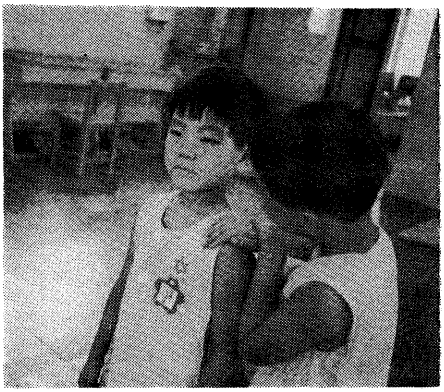
こうじは、スキップをしながら、室の片すみにたち、男児の後から、その肩をかるくポンポンとたたきながら、「ひろやすくん」と声をかけた。肩をたたかれ、ひろやす、と呼ばれた男児はびっくりしてふり向いた。それはひろやすではなく、まさきだったのだ。

人ちがいがわかったしゅん間のこうじの手先は、まさきの肩の上で、何ともてれくさいやら失敗の失望やらの入りまじった表情をし、手のおき場のなさをうったえていた。

まさきが「ぼくまさきだよ」と話ししたのをきっかけに、こうじは「ちがっちゃった」とだけいって、ひろやすをさがしてかけていってしまった。

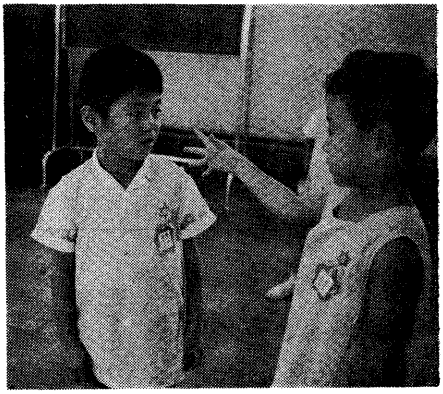
ひろやすをみつけてからのこうじの手先は、まず肩に上がった手がいっしゅん止まり、もう一度、ひろやすをかくにんしてから、手先全体に力をいれて、ひろやすの肩を、ぎごちなくみえるようにたたいていた。

写　真 2



写　真 1

写　真 4



写　真 3

ひろやすが「なに、こうちゃん」といったのもしゅん間わからなかったように、きんちょうしていたのだ。一ぺんかくにんのためなのか指先を全部にぎってからのばして肩をたたいていた。この動作は、かくにんの表われのようだった。こうじは、きんちょうしてたたいたひろやすの肩の上の手先を、ひろやすの顔をのぞきこみ安心しながら、そのまま、肩の上で、きんちょうをゆるめて、ひろやすのくびにからませていった。そして、「ぼく、きみとまさきくんとまちがえて、よんじゃった」とくびをすくめていた。

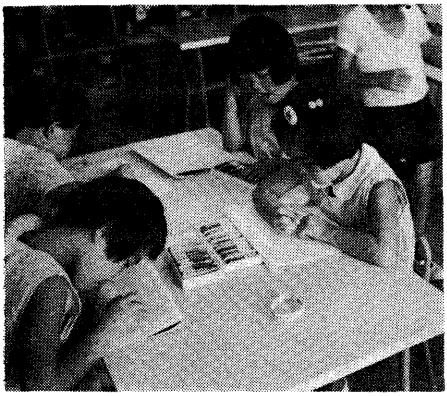
例2　自分の持物や教材（クレヨン）を取りちがえた時と、取りなおした時の指先

（写真5、6）

佳子は、数人の友だちと、自由画帳にたのしそうに、魚の絵を描いていた。

「魚の目は？」といいながら、手をのばしてダイダイ色のクレヨンを取りあげた。魚の目を描き入れようと画面にクレヨンをつけたしゅんか

写　真　5



写　真　6

ん、佳子の手先が、クレヨンをクルクルまわしてこまりはじめた。

「アッ、これ、あやちゃんのクレヨンだった、まちがえちゃったじゃない」とひとりでクレヨンをなぜながら顔を赤らめて、あや子のクレヨン入れにかえした。あや子は無言で佳子が入れたダイダイ色のクレヨンを上からちょっとおさえてみるしぐさをしただけで、絵を描き出していた。

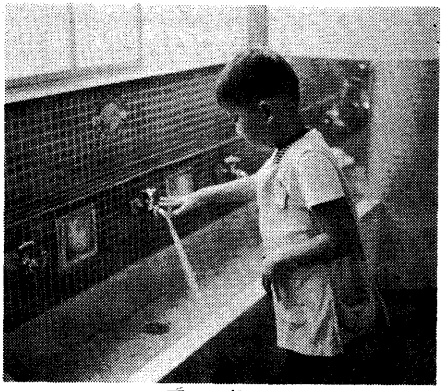
まわりに三名の友だちがいっしょに絵をかいていたが、佳子のこのまちがいをとがめる者はひとりもいなかった。ただ、そうかというようにちょっと描く手を止めただけだった。にもかかわらず、佳子は次から、自分のクレヨンの色をかえて描こうとする時、すごいきんちょうでクレヨンをたしかめて描いていた。

クレヨンを、クルクルとまわして、自分の名前をたしかめてから画面にうつしていた。そのクレヨンをつかむ指先には、すごい力が入っているのだ。また取りちがってはいけない、ときんちょうしている。一枚の絵を描き終わるまでそのきんちょうはつづいていた。その時の顔や体全体での表われを見ているとそれほどのきんちょう感は感じられないのだが、指先は力がこめられきんちょうしていた。

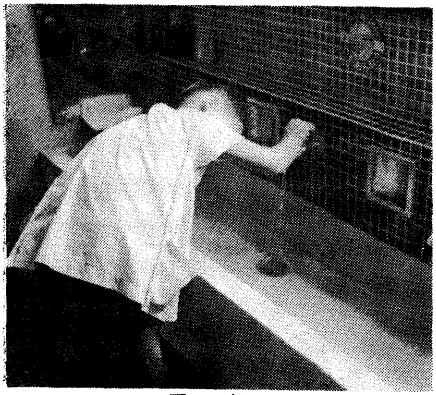
例3　水道の栓をひねりすぎて、水が出すぎてしまった時の指先（写真7、8）

ボールでサッカーごっこをしていた達夫は、手のよごれが気になり、水道のところにいった。

何の気なしに水道の栓をひねったようすだったが、しゅん間、思いがけずたくさんの水がジャーッと出すぎてしまった。はねる水しぶきに、あとずさりしながら、右の手先は水道の栓をわしづかみにして上からおさえているだけだった。



写　真 7



写　真 8

とびのいて、間をおいてわれにかえってからの達夫は、

・一度水道を止めてしまった。その次に指の先端をつかって（親指・人さし指・中指の三本）そろそろ水の出をみつめながら、注意ぶかく水道の栓をひねりはじめた。

水道のじゃ口をのぞきこむようにゆっくりとかくにんしながら栓をひねっていた。適当な水の量が出て来た時、達夫は三本の指を、ちょっと持ち上げてから、大きなためいきをついていた。

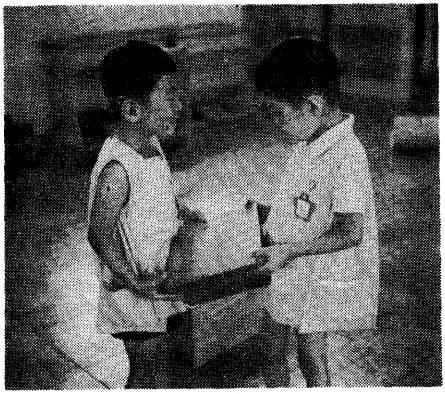
ためいきをついた後にやっと達夫はひとりでにっこりし、手を合わせてせっけんでたんねんに洗いはじめたのだ。このようすをみて達夫の心が指先から手にとるようにつたわってくるのだ。思わず出しすぎた水道の失敗から次は失敗しまいとする指先のきんちょうがすごいのだ。またやってしまってはという心がしゅん間指をきんちょうさせているようだ。

例4　持ったつもりの物を、おとしてしまった時

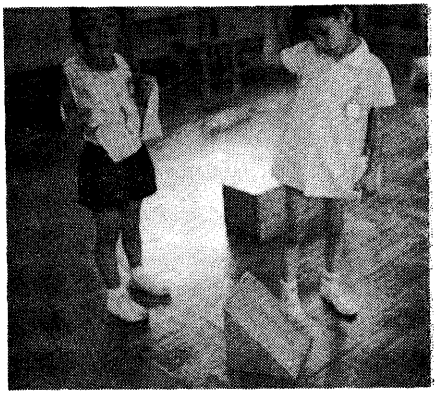
（写真9、10）

積木あそびをしていた（すすむ）は近くにいた、友だちののぼるに「ねえのぼるくん、三角とってよ」とたのんだ。たのまれたのぼるは、ことばで答える前に三角の積木を取り上げたのだが、三角の積木を、つるっと、手からぬけて落としてしまった。

落ちると思っていなかった積木が落ちてしまったしゅん間、のぼるの手先は、右の手が耳のよこにふり上げられ、ぎゅっとにぎりしめられた。左手先はズボンのスソをぎゅっとにぎっていた。そして、次には、両手の指をそろえてこわばらせ、おちた三角の積木をぎゅっとつかんで、すすむのところに持っていって、手わたしていた。その時の手先は、手の平も、指先も全部に力が入って、ぎごちなくきんちょうを表わしていた。



写　真 10



写　真 9

この時も顔や動作は、それほどぎごちなさは感じないのだが、手先は全く力が入りすぎて棒きれのようにぎごちないのだ。

のぼるはこのあとも、自分の手が何かぎごちないもののように感じるのか、自分でもてあましているように手を動かしつづけていた。そしてホールをしばらくぶらぶらしてから右手指を口に持っていってしゃぶっていた。（この動作はぐうぜんだったかもしれない？）

このようすのすぐ後、女児のじゅん子が、うがいのコップを落とした。落としたコップをひろい上げる時の指先も、のぼるの積木の時と全く同じように、小さな片手でひろえるうがいコップに両手をきんちょうさせて近づけて取り上げた。そして取り上げる途中は右手片方でひろい上げてはいたのだが、コップの取手に、指をかけて水をくむときの人指し指など、カチンカチンにきんちょうしていた。

保育者が、指にちょっとでもふれたらポキンと、音がするのではないかと思うほどだった。

例5　ぼたんをとめる時、ボタン穴をまちがえているのに気付いた時（写真11～13）

おいかけごっこをしてあそんでいた真太郎が、遊び終わって、上衣を着に室にかけ込んで来た。近くでねん土をしていたみえ子に何か話しかけながら、気らくにボタンをとめはじめた。二個、三個、とめた時、「あれ、これはいけない」と真太郎は、ボタンがかけちがっているのに気付いたのだ。ハッとわれにかえった時の真太郎は、顔を真赤にして指先に力を入れて、はずしはじめた。

気があせるのと同時に、指先がびっくりしてきんちょうし、こちこちになって、なかなかはずせなくなっている。

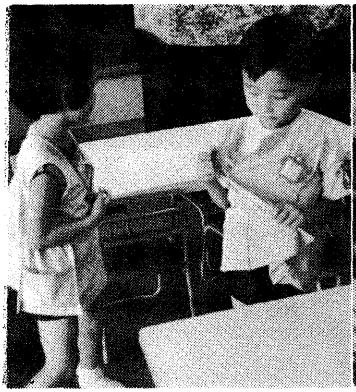


写真 13

写真 12

写真 11

そのようすをみえ子は、「なにやってんのよ。ゆっくり、よくみなさいよ、あわてないで」と真太郎をみつめ、ボタンをはずしてあげようとした。

「いいの、いいからいいから」といいながら声や顔は、少しテレているかなと思う程度にしか見えなかったが、指先や手の平は、ますますきんちょうしてしまい動きが止まってしまったのではないかと思われるような表われをしているのだ。とうとう真太郎は、たまりかねてしまい、ボタンから手をはなし、上衣のすその左右を、わしづかみにし左右にひっぱり上げて、むりにはずしてしまったのだ。

はずし終わってから真太郎は、すぐには指がいうことをきかないために、上衣の前をはずしっぱなしで、みえ子たちのねん土をしばらく見ていた。そして、自分で安定を取りもどしてから、ゆっくりとボタンをはめていたのだ。

真太郎の指をみつめていると、思いがけないことがら（失敗）に対しての指は、本人が意識していないほど、びん感に、失敗をみとめてしまい、すなおにとまどい、次への答えを指自身がみつけようと努力していることがわかる。

ボタンの穴をまちがえただけで、これほど指先がこうちょくしてしまうものだろうか、と子どもの指をのぞき込んでしまう。

まちがえてボタンはめちゃったら、
はずれなくなっちゃった。
ボタンがおこったのかなあー。
ぼくの手が（指）そっちにつれてったんだものねえ。
そのつぎやりなおしたけど、
まだおこってなかなかはまらなかったの。
いつもすぐはまるのにね。

ボタンでおこりんぼだね。　　しんたろう

しばらく休んだ後、ボタンをはめなおしてから、ひとりごとのようにつぶやいた真太郎のことばなのだ。

気らくにやった行動が、思いがけず失敗してしまった時、特に、指先や手をつかってやった行動は、しゅん間的に指が反応することがわかったのだ。

例6　絵本を二枚いっしょにめくってしまった時（写真14）

ママゴトコーナーで、三、四名の女児がひとりひとり一さつずつ絵本をひざの上にのせて見あっていた。

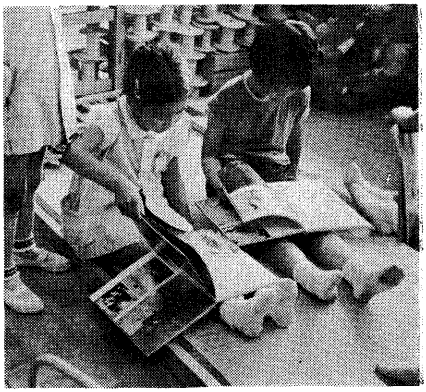
一頁ずつ、思い思いのことを話したり、字をひろいよみしたり、わざわざ友だちの絵本をさかさからのぞき込んで、いろいろのものに見立てて、ふざけたり、よろこんだり想像をたのしんだりしていた。そのうちに、頁を「いちにのさん」でめくることをたのしみ出した。

「そのつぎよ、はい、いち、にいのさん」とめくった時、やす子が「あっ、まって、しっぱい、二枚いっしょになっちゃったー」と大声で友だちにストップをかけた。

おどけたふんい気がいっしゅんストップしたその時、やす子の指はものすごくあせって、たった二枚の紙が一枚にはがれないのだ。

指がこわばってしまって、今までのように、なめらかに頁をくっていくことができなくなったのだ。

その後、やす子は、二、三回スムーズに頁をめくると、また、つまずいて二枚、三枚、いっしょにめくってしまい「アツ、また、まって」といったり、「この本みんなくっついててだめ、とりかえるからまってね」と本をかえたりした。しかし、めくる手や指は、だんだん重くなり、スピードがおちてしまい、みんなのあとから、やっとついていくじょうたいになって、あせればあせるほど、つまずいてしまっている。



写　真 14

「やす子ちゃん、はやく。つまんないや、のろいんだもの」といわれればいわれるほど、指はかたくつっぱってしまい、親指と人さし指のつけ根の方で、ぶきっちょに頁をかくにんしているのだ。

つまずかずに、スムーズに、頁がめくれていた時は、指先が、

かるく本の上にふれ、リズミカルに頁をめくっていたのだ。

失敗と同時に、指のおくのほうで頁をめくるようになっていたのにおどろいた。だんだんきんちょうし、指のじゅうなん性がなくなり棒きれのようにこうちょくしてしまったのだ。

そして全身につかれがでてきて、やす子はハーッとためいきをついて絵本をほうりなげて、「やーめた、つまんない」とママゴトコーナーにねそべってしまったのだ。

このようにいくつかの事例をながめていると、今まで保育者が見つめていた、子どもたちの見つめ方が、いかに不確かで大ざっぱであったかに気付くのだ。

子どもたちが思いがけない失敗に出あった時の体全体での表情は、しゅん間、びっくりしたり、とまどったりはするが、その程度は、まったく表面的で、本当の心の状態はわかりにくい。それは、極度に失敗感を感じると泣き出すとか、そのことから遠のいてしまって、近よろうとしなくなるからなのだ。

ボタンをかけちがったり、友だちを呼びちがったり、水道の栓をひねりすぎたり、絵本を二枚いっぺんにめくってしまったり、など、まわりの友だちや、おとな（保育者）など、あまり気にとめない、かえってかるい話題になったりする、などと感じやすいことがらの失敗が、これほど、子どもたちの心に、ひびいているのだ。しゅん間のきんちょうはいうまでもないが、その後のやりなおしの時にみせる、指先の、手のきんちょうは、見のがしてはいけない大切な表われである。

子ども自身は、気らくにやろうと思っているのかもしれない。しかし心のおくでは、かるい失敗も、次に失敗すまいとする大きなきんちょうになっているのだ。失敗の時、失敗の次に来る子どもたちの表われを、見まちがわないようにしなければならない。（顔や体全体は、見せかけやその一部分しかわからない）

失敗の次に来る指先のきんちょうと、その解消のしかたを見つめることによって、その子ども、ひとりひとりの心の動きや表情をまちがえなく知って、むりなく次の活動に移していく指導の手だて、手がかりをつかむことができると思う。

どんな時に、どのような表情をするか、そして指先は、どううったえているのかを見つめ、ひとりひとりが生活に自信とよろこびを持って前進してゆけるように見つめ、助言するのに、もっともっと、いろいろな場での、子どもたちの、指先や手の反応を見つめなくてはと思う。

失敗、つまずきのだんかいのきんちょうととまどいから、次への活動の安定をどう持たせ、保たせ、ゆたかな発見と、創造（想像も含む）を体験させたらよいのか、子どもたちの真のうったえをあらゆる場と時と所で、正しくつかんでいかなければと考える。

（大田区立蒲田幼稚園）